鹿児島県内科医会・・・入会のお勧め

鹿児島県内科医会長　中村一彦

最近のAI技術の進歩は著しく、将棋、チェスの名人たちがコンピューターに打ち負かされ、不可能と思えた自動車の自動運転も実用化の一歩手前まで来ている。先日の新聞には、大腸内視鏡検査で AI 技術を使うと見逃しが著しく減ると報じられた。医学界においても今後 AI 技術の応用は加速度的に進み、医学・医療の在り方を大きく変えていく可能性がある。遺伝子治療、抗がん剤の進歩、診断・治療装置の大型化などその進歩は留まることを知らない。技術の革新が医師をはじめとする医療従事者、患者さんのプラスに利用されなければならないが、患者さんと直に接する我々第一線の臨床家に課せられた任務は重い。

今までも、第一線の臨床家は進歩する内科学を懸命に研修し、技術の習得に励んできた。私は昭和 44 年に医者になり、循環器病を専門にしてきた。医学生の頃習ったのは心電図が主で、少し心音図の講義があったのみであった。久留米大学第三内科に国内留学し、当時の循環器病学の最先端で研修をしたが、当初、心エコー、冠動脈造影検査などは行われていなかった。現在、普通に行われている心エコーカラードプラー法、冠動脈造影法、心筋シンチ、冠動脈CTなどは私の年代ではいずれも医師になってから勉強してきた。治療で一般的になってきた冠動脈形成術、不整脈治療のアブレーションなども同様である。

技術の革新は診療の様態も大きく変化させてきた。私が循環器病を専門にし始めの頃は心臓弁膜症の診断はもっぱら聴診器に頼っていた。聴診をきちんとできることが循環器医師にとっては必須であった。それでも、進行した僧帽弁狭窄症では拡張期雑音が聞き取れなくなり、それをどう診断していくかが議論されていた。それが今では進歩した心エコー法で研修医でも当てれば判る時代になった。心筋梗塞の患者さんが入ると一週間位は泊まり込んで不整脈の管理を行い救命しようとしたが、それでも死亡率は 30%位であった。それが今や直ちに冠動脈形成術を行い救命率は 95%位に上がっている。

私は消化器病をメインとする講座に属していたので、その診療様態の変化も身近にみてきた。一昔前は 10 ミリの胃がんを診断できるのは、長い訓練を積んだ内視鏡専門医のみであったが、今や機器の進歩は著しく、研修医でも容易に診断出来るようになってきている。胃がんの原因は長くわからなかったが、ピロリー菌が関与することが判り、「胃がんは感染症である」とまで言われるようになってきた。かつては小さな胃がんであっても手術をしていたが、最近は内視鏡技術の進歩によりかなりなものまで内視鏡的に切除されるようになってきた。

我々の先輩医師は、このように変化・進展する医学・医療を第一線で適用すべく、懸命の努力を重ねてきた。そのよりどころになったのが、臨床内科医会、内科医会である。県内科医会の初

代会長樋渡良治先生は「相互の親睦、臨床内科医学の研讃、医道の昂揚、医療制度の検討を目的に内科医クラブを結成した」と述べた。各県の内科医会の上部組織として日本臨床内科医会があるが。猿田現会長は「日本臨床内科医会は、内科領域の学問的研究、臨床および教育で長い歴史をもつ日本内科学会とは別に、1985 年に臨床内科医学体系の確立を志し、内科診療を通じて国民医療の向上を期することを目的に結成された」、「国民から強く求められておりますのは、最新の医療を安全に提供することである」と述べている。

これからの医学・医療の進歩は今まで以上にテンポを速めて行くと考えられる。医学情報はコンピューター上に溢れている。もはや、臨床内科医会などの組織は不要で、医師個人の努力で対応して行くべきなのか。しかし、個人の力には限界がある、膨大な情報を個人で全て網羅することは不可能である。各分野の内科学の進歩に対応するには「道しるべ」が必要である、それが臨床内科医会であるように思う。

我々内科医会は臨床の第一線で求められる知識、技術を効率よく提供できる組織である。臨床内科医会雑誌はどこよりもわかりやすく、臨床の場に即した情報を提供している。この雑誌を購読できるだけでも価値が高いと思っている。医学講演会も薬屋さんベースではやっていただけないテーマも多い。県内科医会は昨年学術部を発足させた。ここで独自の視点による講演会（例えば、抗生物質の適正使用など）、保険診療講習会等を企画していく予定である。

医学がいかに進歩しようとも、患者さんの背景から人柄まで知る臨床家でないと出来ない仕事がある。専門医に紹介が必要な患者さんをどこに紹介するか、ネットで見ればそれなりの情報は得られるが、大事にしている患者さんを本当に信頼する専門医に紹介することは患者さんに喜んで頂けると同時に我々自身の評価にも繋がる。それには内科医会のネットワークの中に身を置いて頂く事が大事ではなかろうかと思う。現在の我々内科医の行く手には難問が次々に押し寄せてきている。もはや、「個人」で対応していくには限界がある。内科医会に入会して頂き、内科医の現場の心を議論・主張していくことが必要になっている。

本県内科系の先生方に、本会に入会頂き、一緒に活動頂ければ幸いです。ご入会を切望しております、よろしく、お願いします。